

セリ・シュルレアリスム=1

アンドレ・ブルトン

黒いユーモア選集

下巻



編集委員=山中散生・窪田般彌・小海永二

Séries
Surréalisme



国文社

セリ・シュルレアリスム=1

黒いユーモア選集 下巻

1969 年 1 月 20 日 初版発行

1975 年 1 月 25 日 三版発行

編著者 アンドレ・ブルトン

発行者 前島幸視

発行所 国文社

東京都豊島区南池袋 1-17-3

電話971-4372 振替 東京 195058

本文印刷 高島印刷

装本印刷 伸光印刷

製本所 並木製本

装幀者 栗津 潔

乱丁・落丁本はおとりかえいたします。



Séries Surréalisme

目次

ジャン・ピエール・ブリッセ 高橋彦明訳 9

オー・ヘンリー 平野幸仁訳 24

アンドレ・ジッド 宗左近訳 34

ジョン・ミリントン・シング 小浜俊郎訳 44

アルフレッド・ジャリ 宮川明子訳 54

レイモン・ルセル 嶋岡晨訳 79

フランシス・ピカビア 宮川淳訳 97

ギョーム・アポリネール 窪田般彌訳 102

パブロ・ピカソ 曾根元吉訳 115

アルチュール・クラヴァン 鈴木孝訳 120

フランツ・カフカ 神品友子訳 130

ジャコブ・ヴァン・ホッデイス 桜木泰行訳 147

マルセル・デュシャン 栗津則雄訳 154

ハンス・アルプ 小海永二訳 165

アルベルト・サビニオ 森乾訳 172

ジャック・ヴァシエ 波木居純一訳 182

バンジャマン・ペレ 飯島耕一訳 192

ジャック・リゴー 滝田文彦訳 203

ジャック・プレヴェール 大岡信訳 211

サルヴァドール・ダリ 塩瀬宏訳 218

ジャン・フェリー 宮川明子訳 230

レオノーラ・カリントン 有田忠郎訳 238

ジゼール・プラシノス 阿部弘一訳 246

ジャン・ピエール・デュプレー 稲田三吉訳 254

あとがき 山中散生 265

黒いユーモア選集

ジャン＝ピエール・ブリッセ

ブリッセの、とりわけ注目すべき作品が、ユーモアとの関係において考えられる価値があるとしても、その作品を支配している意図はどうみても諧謔的だとして通用するわけにはいかない。作者は実際、いかなる機会にも、この上もなくまじめな、この上もなく重々しい態度を捨てない。読者が彼自身のためにユーモアの中に隠れ家を見つけてやろうという気になるのは、哲学的あるいは科学的なあらゆる組織の検討を是非とも必要とする人柄は彼に相違ないと確認する過程の終局においてなのである。彼にとっては、あまりにも重要な感情的動揺を、つまり思考の地層そのものをゆさぶり、それ以前のあらゆる種類の意識した利益を消滅させ、社会生活における最も基本的原理を問題とする一つの発見を承認することに基因するような動揺を、自らのために蓄積する必要性が問題となるのだ。このような発見は先験的には不可能と考えられており、精神病院というものは、それが万一発生するような途方もない場合に、全く通過させまいとして設けられている。一般的な予防反応は、ブリッセに関する限り、目立つほどあまり活発でなかったように思われる。と言うのも彼は

一九一二年に、一部の作家連によって思想界の大御所という皮肉な肩書をつけられるに至っただけであるからだ。この嘲弄的な高位は、人間精神が提供する最も大きな特異性のまえを眼をつぶって通りすぎる者たちのかたわらでしか、彼にふさわしいものとならないであろう。（われわれの興味を惹く大部分の作家たちの発信的ユーモアとは反対に）全く受信的ユーモアの中におけるブリッセの感情的流出は、このユーモアを構成するいくつかの特徴を全く格別にはつきりさせてくれる。作者は、彼が暴露する以前に宿されたすべてのものが無価値で無効にとられるのかも知れぬような懐胎期間の秘密を握っているかのように姿を現わすのだ。われわれはここで、個人の復帰ではなく、彼自身の中における幼年時代へのあらゆる種類の復帰に立ち会う。（税関吏ルソーの場合にも、同じような何かが起こる）。一般に受け入れられた思想の性質と、この完全な素朴主義の作家あるいは画家における確信との間にあらわれる明らかな矛盾は、責任者が関与しない大がかりなユーモアを生み出すものである。

ジャン・ピエール・ブリッセの主要な思想はこうだ。《神である言葉はそのひだの中に、最初の日からの人類の歴史を、それぞれの国語の中に愚直な者たちも学者たちをも驚かせるほどであろうほど確かに反論の余地もなく、それぞれの民族の歴史を保存している。》一挙に、彼は言葉の分析によって、人間が蛙の血をひいていることを明らかにすることを許される。彼が正当化し、ついで未曾有の豊富な言葉の連合の遊びによって開拓しようとしているこの発見物は、彼のために、《人間の精液は顕微鏡で見ると、ちょうど蛙の小さなおたまじゃくしで一杯になった水たまりを見る思いがする。この精液の小さな生き物は完全におたまじゃくしの形と動きを思い起こさせる》という解

科学的証明を強固なものとする。かくして幻覺的な大きな価値をもった汎有性的基盤の上に、そしてめったに見られぬ博学の陰に、持ち前の正確さが深い感銘を与えずにはおかぬ言葉の方程式の目のまわるような連続が展開され、生命の本の確かで誤りのない鍵だと自称する学説が組織される。ブリッセは、彼が人間にもたらし、しかも彼に神のような全能をさずけてくれるに違いない贈り物の輝きに、彼自身が眩惑されていることを隠しはしない。彼は自らをモーゼと予言者たち、キリストと使徒たち以外の先行者の類だとは認めていない。彼は自らを、黙示録の第七天使と復活の大神使として披露する。この天使の階級からの交渉も、人間的な面の上では、その創始者にとっては最悪の幻滅に価するに違いなかったことは言うまでもない。へ一八八三年に発表された『論理的文法』は、（と彼は言っている）学者の世界にかなりひろまった。われわれはそれをコンクルのためアカデミーに提出したが、われわれの作品はルナン氏によって却下された。一八九一年に、出版してくれる者を見付けることができなくてわれわれは、自分たちでパリにおいて揭示と二回の公開講演によって『神の神秘』を発表した。この本はアンジュにおいて学生たちの中に感動の時をよび起こした。われわれはそこで講演をする準備をしていたのだが、当局はわれわれの計画を台なしにしてしまった。一九〇〇年に、われわれは、『神の科学』とわれわれの仕事の全部を要約した『大ニュース』と言う千部印刷した刷り物を発表した。われわれの売り子たちは体がきかなくなった者のようになり、決してこの大ニュースを売りつけなかった。われわれはそれのパリの中に無料で配布させ、本のようにそこらじゅうにそれを少しづつ送った。その版は刷り物の配布の後を追って売れたのだが、そのことをわれわれは受託人が破産した後始めて知らされたのである。これらの二つ

の出版物はかなりの反響を呼んだので、「プチ・パリジャン」紙は間接的な態度で、『狂人の家』と題する社説の全部（一九〇四年七月二十九日）を、われわれのために書くに至った。以下が直接にわれわれに触れている箇所である。狂人が引き合いに出されているのだが、「彼は頭韻法とちぐはぐな話との組織的方式の上に、『神の科学』と称する形而上学概論のすべてを確立することを主張していた。彼にとって実際に、単語がすべてなのだ。単語の分析は事物の関係を表わす。私にはこの氣を狂わせるような哲学の数節を引用するのに場所がない。と言っても、それらを読む人は精神の中に本当の混乱を抱き続けるようになる。私の読者たちは、そんなことにならないようにしてあげていることに對し私に感謝するであろう」と。（ブリッセは続ける。）司法警官であつて、その書きぶりは上記のわかりにくい駄弁と何ら共通のものを持っていないこの狂人は、だがしかしこの批評に喜び、感謝さえした。『神の科学』はそれが世に出た時は、黙示録の第七のトランペットであつた。そして一九〇六年に、われわれは『実現された予言』を発表した。二千部のかんり長い趣意書がさまざまな方面に發送され、またわれわれの声を聞かせなければならなかつたので、一九〇六年六月三日に学会会館で講演が行なわれた。われわれは非常な惡意に逢ひ、パリ中に用意されたポスターは、会館のまわりにしか貼られなかつた。われわれは五十人ばかりの聴衆を持った。そして憤激しながら今後はだれも第七の天使の声を聞くことはないだろうということを確信した。（すっかり新しい）『神の科学』の第二版は、しかしながら『人間の起源』という表題のもとに一九一三年に現われる。著者は、年老い疲れて、自分の至高の計画であるあらゆる國語の辭書をうまく作りあげることができぬことを恐れる、と言っている。

ユーモアと言う角度のもとで考察すると、ジャン・ピエール・ブリッセの作品は、アルフレッド・ジャリのパタフィジック^{新註}あるいは《潜在的性質によって示された事物の特性を象徴的に輪郭に付与する、架空の解決の学》を、サルヴァドール・ダリの偏執的批評活動あるいは《錯乱した諸現象の解釈的批評の連合に基づいた非合理的認識の自然發生的方法》に、結びつける線を支配している。彼独特の位置からその重要性を引き出しているのだ。レイモン・ルセルの作品、マルセル・デュシャンの文学作品が、かれらの知らぬ間であらうとなかろうと、ブリッセの作品との緊密な関係において生まれたと言うことは、一目瞭然であり、ブリッセの支配力は、レオン・ポール・ファルグ、ロベール・デスノス、ミシェル・レリース、アンリ・ミショ、ジェイムス・ジョイス、パリの若いアメリカ派といった、言語の詩的崩壊の最も新しい試み（《言葉の革命》）にまで及んでいるのかも知れぬ。

書誌

『論理的文法』一八八三年、『神の神秘』一八九一年、『神の科学』一九〇〇年、『実現された予言』一九〇六年、『人間の起源』一九一三年。

言葉の大法則

あるいは

言葉の鍵

言葉の中には今日まで知られていない数多くの法則が存在する。その中で最も重要なのは、一つの音あるいは同じ、はっきりした、明るい一連の音が、これらの名称あるいはこれらの単語を書いたりあるいは理解したりする方法に修正を加えることによって、異なったものを表わすことができるということである。同じ音でもって言い表わされたすべての観念は、同じ語源を持ち、その根源において、すべて同じ対象に関係している。例えば次の音がそうだ。

Les dents, la bouche.

齒、口。

Les dents la bouchent,

齒は口をふさぐ、

l'aidant la bouche.

口を助けながら。

L'aide en la bouche.

口における援助。

L'aides en la bouche.

口における醜さ。

Laid dans la bouche.

口の中の醜いもの。

Lait dans la bouche.

口の中のミルク。

L'est dans le à bouche.

口の中に損害がある。

Les dents-là bouche.

その歯をふさげ。

もし私が齒、口と言つても、それは齒が口の中にあると言うごくありふれた觀念しかよびおこさない。そこでこそ言葉の中に隠され、七つの刻印で封印された生命の本の外部がよく理解できるというものだ。われわれは、今日は開かれているこの本の中に、齒、口と言うこれらの言葉の下に何が隠されていたかを読みとろうとするのだ。

齒は口の入口をふさぎ、口は助けてこの閉鎖に寄与する。齒はそれをふさぎ、口がそれを助ける。齒は助手、口における支援者であり、それはまたあまりにもしばしば口において見苦しいし、それはまた醜いものでもある。別の場合にはそれはミルクである、齒は口の中のミルクのように白いのだ。

損害が口の中にある、は次のように理解されるべきである、この口には、損害、つまり痛みあるいは損失がある、あるいはごく簡単に、私は齒が痛い、と。同時にはじめの損害は語源として齒を持つていることが了解される。その齒をふさげ、は次のことに相当する、これらの齒を閉じるか隠すかせよ、口を閉じよ。

言葉の中にこのように書かれ、そこに明瞭に読みとられるもののすべては、避けることのできぬ真理をもつて真実なのであり、全地球上で真実なのだ。ただ一つの国語の中で言われることは、全